

# 高齢の女性を介護する介護者の心理状態と その経時的変化

— 息子・娘・夫の比較 —

北本さゆり・黒田 研二

## 抄録

本研究は高齢女性を介護する介護者について、介護開始時と一定期間介護継続後の二時点で認知的介護評価がどのように変化するかを続柄（息子・娘・夫）により比較し、さらに両時点の認知的介護評価に関連する事柄を明らかにすることを目的とした。

調査対象者は、母を介護する息子介護者、母を介護する娘介護者及び妻を介護する夫介護者とした。居宅介護支援事業所等に質問紙配布を依頼し、回答者からの直接返送とした。配布数は286人で、回答数は94人であった（回収率32.9%）。内訳は息子12人、娘54人、夫24人、その他4人であり、その他を除いた90人を分析対象とした。調査項目は、被介護者の状況、介護開始時の就業の有無、介護保険の知識の程度、代替者の有無、他の介護の有無、日々の暮らし向き、家族や近隣友人からの支援の満足度、介護者と被介護者との関係に関する項目とした。従属変数は、肯定的評価と否定的評価を同時に測定できる認知的介護評価尺度を使用した。

結果として、①一定期間介護継続後に、全体として介護における否定的評価は変化していなかったが、肯定的評価はいずれも有意に上昇していた。②続柄別では、夫介護者の介護継続不安感が上昇し、娘介護者の介護役割充足感、高齢者への親近感が上昇していた。③息子介護者は他の被介護者を過去または現在介護している割合が高く、ダブル介護の危険性を孕んでいた。④否定的評価、肯定的評価の両側面に被介護者への尊敬の程度が関連しており、介護が一定期間継続した後も続いていた。⑤近隣友人からの支援の満足度が認知的介護評価に関連していた。支援者は介護者と被介護者との関係やソーシャルサポートネットワークを適切にアセスメントし、介護者の意に合ったインフォーマルサポートが得られるようマネジメントを行う必要がある。

キーワード：高齢の女性、続柄、認知的介護評価、否定的評価、肯定的評価

## 1. はじめに

要介護者等のいる世帯の世帯構造は、2001年に32.5%を占めていた三世帯世帯が2016年には14.9%と15年間で激減しており、一方で、単独世帯が15.7%から29.0%、夫婦のみの世帯が18.3%から21.9%、未婚の子と同居が11.0%から16.0%といずれも増加している（厚生労働省, 2017）。世帯構造の変化に伴い、介護者の属性も変化してきている。同居の主な介護者の性別構成割合をみると、2001年に23.6%であった男性介護者の割合が、2016年には34.0%に増加し、3人に1人が男性介護者となっている。続柄では嫁による介護の割合が減少し、妻、

夫、娘、息子による介護の割合が増加している。なかでも息子介護者の割合の増加が最も著しく、10.7%から17.2%と15年間で1.6倍となっている。次いで夫介護者が11.6%から15.6%と増加している。

男性介護者に関連する問題として高齢者虐待の問題が挙げられる。平成28年度高齢者虐待防止法に基づく対応状況等に関する調査によると、養護者による高齢者虐待16,384件（虐待者数17,866人・被虐待者数16,770人）のうち、虐待者の続柄は息子が7,237人（40.5%）、夫が3,837人（21.5%）であり、両者を合わせると6割以上を占めている（厚生労働省, 2018）。一方、被虐待者の性別では、女性が

12,957人(77.3%)と8割近くを占めており、高齢女性を介護する男性の困難感が推察される。

男性介護者に限らず高齢者等を介護する家族介護者の心理的負担は計り知れないであろう。介護を行う際の感情についての研究は、まず介護負担感に注目が集まり、その負担感を調べる尺度が開発されるとともに、介護者の介護負担に影響を与えている要因が調査された。Zarit et al. (1980)は、主介護者以外の家族の訪問頻度が介護者の負担感の程度に影響していることを報告した。日本では、高齢者と介護者との人間関係の良さを定量的に評価するための尺度が開発され、高齢者の異常精神症状発現には介護者・高齢者間の人間関係が関連することが示唆された(市川ほか, 1985; 武長ほか, 1987)。中谷・東條(1989)や吉田ほか(1997)は、開発した尺度を用いて負担感を調査した結果、介護者に健康上の問題があること、常勤形態で就業していないこと、副介護者がいないことが負担感を高める要因であると述べている。吉田ほか(1997)は、副介護者の欠如以外に、睡眠中に起こされることや経済的困難が関与していると示唆している。Zarit et al.の介護負担尺度については荒井ほか(2003)が福祉現場で簡便に測定できるように日本語短縮版(J-ZBI\_8)を作成している。

介護負担についての研究が進められるなか、介護肯定感についても関心が向けられるようになってきた。Lawton et al. (1989)は、介護を行うときの感情を負担感という一側面だけでなく個人の対処能力や満足感も含めた包括的なものとして捉え、介護評価(caregiving appraisal)尺度を作成した。Lawton et al.の影響を受け、広瀬ほか(2005, 2006)は肯定・否定両側面で構成される認知的介護評価の尺度を開発し、認知的介護評価には、仕事の有無、インフォーマルサポートへの満足度、夜間介護の有無、介護者の年齢が関与していることを報告している。櫻井(1999)は、介護負担感と介護肯定感を同時に測定できる尺度を開発し、介護肯定感により「限界感」という負担感が軽減されることを示した。

このように介護を行う際の感情について様々な尺度が開発され、否定的感情だけでなく肯定的感情についても数値化することがさかんに行われるようになった。これらの研究により否定的感情及び肯定的感情の程度や属性による比較、それに影響を与える

要因などが示されるようになってきたが、介護を実践している間、同じような感情が継続するわけではない。介護の経過に伴って否定的感情や肯定的感情が変化すると思われるが、それに言及した論文は見当たらない。

そこで、本研究は高齢女性を介護する介護者について、介護開始時と一定期間介護継続後の二時点で認知的介護評価がどのように変化するかを続柄(息子・娘・夫)により比較し、さらに両時点の認知的介護評価に関連する事柄を明らかにすることを目的として実施した。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

調査対象者は、母を介護する息子介護者、母を介護する娘介護者及び妻を介護する夫介護者とした。

### 2. 調査方法及び倫理的配慮

A市高齢福祉担当部署の協力を得て、居宅介護支援事業所及び地域包括支援センター(以下、「事業所等」という)の介護支援専門員等に対象者への質問紙配布を依頼した。まず、事業所等に協力依頼文を郵送し、研究に協力してもらえる場合には、対象者数を記載した用紙を返送してもらった。その後、対象者数分の質問紙を事業所等に送付し、介護支援専門員等から対象者へ配布し、対象者から直接研究者宛に返送してもらった。調査期間は2019年6月15日から8月10日までとした。

研究に協力していただいた事業所等は32事業所で、対象者数は息子74人、娘136人、夫76人で合計286人であった。回答は94人から得られ(回収率32.9%)、内訳は息子が12人(同16.2%)、娘が54人(同39.7%)、夫が24人(同31.6%)、その他(嫁、婿)が4人であった。その他を除いた90人を分析対象とした。

倫理的配慮として、調査への協力は回答者の自由意思であること、回答されなくても何ら不利益を被ることはないこと、調査目的以外に使用することはないこと、匿名性を確保することを依頼文に明記した。なお、本研究は関西大学人間健康学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 調査項目

介護者の属性及び状況として、年齢、続柄、介護期間の他に、心理的プロセスに関連すると思われる事柄を調査項目に選んだ。具体的には、介護開始時の就業の有無、介護保険の知識の程度（4段階）、被介護者の最近（3か月以内）の変化の有無、介護の代替者の有無、家族からの支援の満足度（4段階）、近隣友人からの支援の満足度（4段階）、被介護者以外の他の介護の有無を選択した。それに関連した項目として介護開始時に二人世帯か否か、日々の暮らし向き（経済面・4段階）についても尋ねた。

また、介護開始までの被介護者との関係に関連する項目として、介護者と被介護者の介護前からの相互の生活の把握状況、相談できる程度、介護者の介護への自覚、被介護者への尊敬の程度を選択した。さらに、被介護者の現在の姿と以前のイメージのギャップの有無とそれをどう感じるかを合わせて尋ねた。介護者と被介護者との関係に関する項目のうち、「尊敬」についての項目は、市川ほか（1985）や武長ほか（1987）が作成し、活用している介護者・患者関係アセスメント票（CPR）を参考に設定した。武長ほか（1987）は、「尊敬」は介護者と高齢者との人間関係の良し悪しに関連する重要な項目であると述

べている。

介護者を取り巻く環境として、介護者と同居している家族員の続柄、利用している介護保険サービスの種類を項目とした。

介護に対する認知的評価については、肯定的評価と否定的評価を同時に測定できる広瀬ほか（2005）の認知的介護評価尺度を使用した（表1）。この尺度は6つの下位尺度があり、「社会活動制限感」（5項目）「介護継続不安感」（5項目）「関係性における精神的負担感」（3項目）は否定的評価を、「介護役割充足感」（6項目）「高齢者への親近感」（4項目）「自己成長感」（3項目）は肯定的評価を表わしている。各項目において、「とてもそう思う」（4点）から「まったくそう思わない」（1点）までを選択してもらい、下位尺度ごとに点数化し従属変数とした。一定期間介護継続後（現在）の認知的介護評価は6つの下位尺度を使用するため26項目すべてを尋ね、介護開始時の認知的介護評価は、「自己成長感」を除いた5つの下位尺度を使用することとし、23項目について回答を得た。質問の順序としては、まず先に一定期間介護継続後（現在）の認知的介護評価を質問し、最後に6か月以上介護を行っている人に対して、介護開始時を振り返ってもらい当時の認知的介護評価を

表1 認知的介護評価尺度（広瀬ほか，2005）

認知的介護評価尺度			クロンバッフ $\alpha$ 係数	
			開始時	現在
否定的評価	社会活動制限感	趣味や社会活動などの自由時間がとれなくて困る ○○さんのことが気になって昼間思うように外出できないので困る 親戚、近隣、友人との付き合いに支障をきたして困る 世話で家事やその他のことに手がつけられなくて困る ○○さんが家にいるので友だちをよびたくても自宅によべないので困る	0.804	0.862
	介護継続不安感	この先ずっとお世話を続けていかねばならないことが不安である この先、○○さんの状態がどうなるかわからないことが不安である 今後お世話をすることが自分の手に負えなくなるのではないかと不安になる お世話を代わりにしてくれる親戚がいたら代わってもらいたい 自分でお世話できる限界まできたと感じる	0.878	0.877
	関係性における精神的負担感	○○さんの介護のことで家族や親戚と意見が食い違うことがある 家族、親族が自分の気持ちを分かってくれない ○○さんのことで近所に気兼ねしている	0.835	0.760
肯定的評価	介護役割充足感	○○さんのお世話を義務感というより自分の意思でしている 私は介護することは価値のあることだと思う 自分は○○さんのために必要なことを行っている 自分が介護していてよかったと思う 世話の苦労はあっても前向きに考えていこうと思う ○○さんのお世話を引き受けることは自分の評価を高める	0.838	0.805
	高齢者への親近感	○○さんはあなたがお世話していることに感謝していると思う お世話することで○○さんと気持ちが通じ合うように感じる ○○さんが家族によって介護されていることをうれしく思う ○○さんがいっしょにいると楽しいと感じる	0.911	0.859
	自己成長感	介護することは自分の老後のためになると思う 介護のおかげで人間として成長したと思う ○○さんのお世話をすることで学ぶことがたくさんある		0.683

尋ねた。介護期間が6か月未満であった人は4人で、娘のみであった。なお、使用した認知的介護評価尺度はすでに広瀬ほか(2005)によりその信頼性は確かめられており、本研究においてもクロンバッファ $\alpha$ 係数は表1に示すとおり0.683から0.911と信頼性を確認することができた。

#### 4. 分析方法

介護開始時と一定期間介護継続後で認知的介護評価がどのように変化するかを調べるために、「自己成長感」を除く5つの下位尺度について、続柄ごとに対応のあるt検定を行った。また、各下位尺度の平均得点を続柄別に比較した。

次に認知的介護評価に関連すると考えられる要因について続柄によって差があるのかを $\chi^2$ 検定を用いて分析した。有意差がみられたもので、期待値5未満のセルが全体の20%以上または最小期待値が1未満のものはFisher直接法を用いて検定を行った。

さらに、介護開始時と一定期間介護継続後のそれぞれの時点において、認知的介護評価を従属変数として、それに関連する事柄を明らかにするために重回帰分析を行った。介護開始時の独立変数は、「介護者の続柄」の他に、開始時の心理的プロセスに関連があると思われる「介護開始時の就業の有無」「介護保険の知識の程度(4段階)」を選択した。それに関連した項目として、「介護開始時に二人世帯か否か」「暮らし向き(4段階)」を選んだ。また、介護開始までの被介護者との関係に関連する項目として、「介護前からの介護の自覚の程度」「介護前の被介護者の生活の把握」「相談しあえる間柄の程度」「被介護者への尊敬の程度」(いずれも4段階で尋ねたものを二値変数に置き換え)を選択した。

一定期間介護継続後の独立変数は、介護開始時と同様、「介護者の続柄」と「介護保険の知識の程度(4段階)」「暮らし向き(4段階)」を選択した。介護期間については、本研究の平均介護期間が約5年であることから、5年を基点として0-2年未満、2-5年未満、5-10年未満、10年以上という4段階に分類し、「期間年分類」として取り入れた。また、一定期間介護継続後の心理的プロセスに関連があると思われる「被介護者の介護度(7段階)」「被介護者の最近(3か月以内)の変化の有無」「代替者の有無」「家

族からの支援の満足度」「近隣友人からの支援の満足度」を項目に選んだ。なお、「家族からの支援の満足度」及び「近隣友人からの支援の満足度」は4段階で尋ねたものを二値変数に置き換えた。介護者と被介護者の関係に関する項目の中で、特に介護開始時に関連が強いと思われる「介護前からの介護の自覚の程度」「介護前の被介護者の生活の把握」は省き、「相談しあえる間柄の程度」「被介護者への尊敬の程度」は一定期間介護継続後の独立変数として残した。さらに、介護継続後の介護者と被介護者の関係に関する項目として「被介護者の現在の姿と比較して以前とのギャップをつらいと感じるか否か」を項目に加えた。分析には、2018 SPSS Statistics25を用いた。

### III. 研究結果

#### 1. 介護者・被介護者の属性・状況

介護者の年齢は50歳代が最も多く、次いで60歳代である。続柄別では、息子介護者の平均年齢は61.3歳、娘介護者59.9歳、夫介護者80.9歳であった。介護開始時に就業していた人は55.6%であった。暮らし向きは、「ややゆとりがある」と回答した人が51.1%と半数を占めていた。被介護者との居住については、同居が83.3%、別居が16.7%であり、介護が必要となったときに同居した人が14.4%であった。被介護者以外の人を介護した経験については、過去も含めて「介護したことがある」と回答した人が33.3%と全体の1/3を占めていた。

被介護者の年齢は80歳代が最も多く54.4%であり、90歳以上と合わせると約8割を占めていた。介護度は要介護2が最も多く28.9%、次いで要介護1が17.8%であった。介護負担を助長する言動では、「ひどい物忘れ」が50.0%と半数にみられ、「失禁」が44.4%、「被害的」が22.2%であった。利用している介護保険サービスは、通所介護・リハが最も多く85.6%の被介護者が利用していた。次いで福祉用具・住宅改修が56.7%と半数以上が利用していた。ショートステイは26.7%、訪問介護は20.0%であった。

#### 2. 介護開始時と一定期間介護継続後の続柄別認知的介護評価の変化

介護開始時と一定期間介護継続後の認知的介護評価の変化について、自己成長感を除く5つの下位尺

表2 介護者・被介護者の属性・状況

n=90

介護者の属性・状況	カテゴリー	数	%	被介護者の属性・状況	カテゴリー	数	%
年齢 平均 65.7 歳 SD 11.1	40 歳代	2	2.2	被介護者の年齢 平均 85.0 歳 SD 6.7	60 歳代	1	1.1
	50 歳代	31	34.4		70 歳代	18	20.0
	60 歳代	28	31.1		80 歳代	49	54.4
	70 歳代	15	16.7		90 歳以上	22	24.4
	80 歳代	12	13.3				
続柄	息子	12	13.3	被介護者の介護度	要支援1	5	5.6
	娘	54	60.0		要支援2	11	12.2
	夫	24	26.7		要介護1	16	17.8
続柄別年齢 息子 平均 61.3 歳 SD 7.8	40 歳代	1	8.3		要介護2	26	28.9
	50 歳代	4	33.3		要介護3	13	14.4
	60 歳代	5	41.7	要介護4	12	13.3	
	70 歳代	2	16.7	要介護5 (無記入)	6 1	6.7 1.1	
娘 平均 59.9 歳 SD6.3	40 歳代	1	1.9	介護負担を助長する言動	外出で戻れない	17	18.9
	50 歳代	27	50.0		昼夜逆転	12	13.3
	60 歳代	23	42.6		失禁	40	44.4
	70 歳代	3	5.6		大声を出す	7	7.8
夫 平均 80.9 歳 SD5.2	70 歳代	10	41.7		介護への抵抗	17	18.9
	80 歳代	12	50.0	ひどい物忘れ	45	50.0	
	90 歳代	2	8.3	被害的	20	22.2	
介護開始時の就業の有無	あり	50	55.6	利用しているサービス	ショートステイ	24	26.7
	なし	40	44.4		通所介護・リハ	77	85.6
暮らし向き	たいへんゆとり	1	1.1		訪問介護	18	20.0
	ややゆとり	46	51.1		訪問看護	12	13.3
	やや苦しい	31	34.4		小規模多機能型	6	6.7
	たいへん苦しい	11	12.2	福祉用具住宅改修	51	56.7	
	(無記入)	1	1.1	定期巡回随時対応	4	4.4	
被介護者との居住	別居	15	16.7	その他	5	5.6	
	介護前から同居	56	62.2	介護期間 平均 60.5 か月	息子 13-180 か月 平均 53.3 か月	/	/
	介護必要時同居	13	14.4		娘 0-205 か月 平均 62.8 か月		
	介護度上昇時同居	2	2.2		夫 12-100 か月 平均 59.0 か月		
	その他同居	4	4.4				
他者の介護	7	7.8					
以前他者を介護 以前も現在も介護 介護したことがない (無記入)	以前他者を介護	22	24.4				
	以前も現在も介護	1	1.1				
	介護したことがない	48	53.3				
	(無記入)	12	13.3				

度について、続柄ごとに対応のある t 検定を行った (表 3)。

介護開始時と一定期間介護継続後の認知的介護評価について、全体として否定的評価ではいずれの下位尺度も変化していなかった。一方で肯定的評価は、介護役割充足感、高齢者への親近感のいずれも有意に上昇していた。

続柄別にみると、一定期間介護継続後、息子や娘の否定的評価は変化がみられなかったが、夫の介護継続不安感が有意に上昇していた ( $p < .01$ )。また、肯定的評価では娘の介護役割充足感 ( $p < .05$ ) と高齢者への親近感 ( $p < .01$ ) が有意に上昇していた。なお、一元配置分散分析を用いて続柄の比較を行ったが、有意差はなかった。

### 3. 認知的介護評価との関連を検討する変数の続柄による相違

続柄により差のあった項目は、介護開始時の就業の有無、暮らし向き、介護開始時二人世帯か否か、被介護者以外の介護経験の有無であった (表 4)。介護開始時の就業は、夫に比べて娘の就業が有意に多かった ( $p < .001$ )。暮らし向きは、「たいへんゆとりがある」「ややゆとりがある」「やや苦しい」「たいへん苦しい」の 4 段階で尋ねており、「たいへん苦しい」という回答が夫が娘に比べて多かった ( $p < .05$ )。介護開始時に二人世帯であった割合は、夫が娘に比べて多かった ( $p < .01$ )。また、被介護者以外に他の人を現在あるいは過去に介護したことのある割合は息子が 8 割を超えており、夫に比べて多かった ( $p < .001$ )。

表3 続柄別認知的介護評価の変化

		全体		息子		娘		夫		F検定
社会活動 制限感	開始時	11.97	n=79	11.92	n=12	12.34	n=47	11.13	n=23	ns
	現在	12.15	n=79	11.91	n=12	12.29	n=47	12.04	n=23	ns
	t検定	ns	n=79	ns	n=11	ns	n=46	ns	n=22	
介護継続 不安感	開始時	12.96	n=78	13.58	n=12	13.00	n=46	12.57	n=23	ns
	現在	13.37	n=78	13.36	n=12	13.16	n=47	14.09	n=23	ns
	t検定	ns	n=78	ns	n=11	ns	n=45	p<.01	n=22	
関係性にお ける精神的 負担感	開始時	5.66	n=76	5.33	n=12	6.00	n=46	4.96	n=23	ns
	現在	5.58	n=76	5.27	n=11	5.92	n=49	5.09	n=22	ns
	t検定	ns	n=76	ns	n=11	ns	n=44	ns	n=21	
介護役割 充足感	開始時	16.97	n=78	15.64	n=11	16.72	n=46	18.04	n=23	ns
	現在	17.74	n=78	16.82	n=11	17.59	n=49	18.30	n=23	ns
	t検定	p<.05	n=78	ns	n=10	p<.05	n=45	ns	n=23	
高齢者への 親近感	開始時	10.99	n=77	10.50	n=12	10.42	n=45	12.23	n=22	ns
	現在	11.53	n=77	11.27	n=11	11.57	n=47	11.70	n=23	ns
	t検定	p<.05	n=77	ns	n=11	p<.01	n=44	ns	n=22	
自己成長感	現在	8.09	n=86	7.64	n=11	8.06	n=52	8.39	n=23	ns

表4 認知的介護評価との関連を検討する変数の続柄による相違

	変数	息子		娘		夫		$\chi^2$ 検定
就業	就業あり	6	50.0%	42	77.8%	2	8.3%	p<.001
	就業なし	6	50.0%	12	22.2%	22	91.7%	
暮らし向き	たいへんゆとり	0	0.0%	0	0.0%	1	4.2%	p<.05
	ややゆとり	8	66.7%	26	49.1%	12	50.0%	
	やや苦しい	2	16.7%	24	45.3%	5	20.8%	
	たいへん苦しい	2	16.7%	3	5.7%	6	25.0%	
開始時の介護 保険の知識	手続き・内容	1	8.3%	12	22.2%	4	16.7%	ns
	相談の場のみ	1	8.3%	13	24.1%	9	37.5%	
	制度存在のみ	9	75.0%	18	33.3%	9	37.5%	
開始時二人世帯	ほとんど知らない	1	8.3%	11	20.4%	2	8.3%	p<.01
	被介護者と二人世帯	5	41.7%	13	24.1%	15	62.5%	
介護による家 族員の変化	上記以外の世帯	7	58.3%	41	75.9%	9	37.5%	ns
	変化あり	1	8.3%	16	30.2%	3	12.5%	
介護前からの 自覚	変化なし	11	91.7%	37	69.8%	21	87.5%	ns
	自覚の程度が強い	9	81.8%	45	84.9%	16	69.6%	
介護前の生活 把握	自覚の程度が弱い	2	18.2%	8	15.1%	7	30.4%	ns
	把握の程度が高い	11	100.0%	53	100.0%	21	91.3%	
相談しあえる 間柄	把握の程度が低い	0	0.0%	0	0.0%	2	8.7%	ns
	相談できる程度高い	8	72.7%	46	86.8%	21	91.3%	
被介護者への 尊敬	相談できる程度低い	3	27.3%	7	13.2%	2	8.7%	ns
	尊敬の程度が高い	8	72.7%	39	73.6%	21	91.3%	
被介護者の変 化	尊敬の程度が低い	3	27.3%	14	26.4%	2	8.7%	ns
	最近の変化あり	4	36.4%	22	40.7%	11	45.8%	
代替者の有無	最近の変化なし	7	63.6%	32	59.3%	13	54.2%	ns
	代替者あり	7	58.3%	23	43.4%	14	58.3%	
家族の支援	代替者なし	5	41.7%	30	56.6%	10	41.7%	ns
	満足度高い	8	80.0%	37	74.0%	16	69.6%	
近隣友人の支 援	満足度低い	2	20.0%	13	26.0%	7	30.4%	ns
	満足度高い	7	77.8%	38	79.2%	18	90.0%	
他の介護 現在・過去	満足度低い	2	22.2%	10	20.8%	2	10.0%	p<.001
	他の介護あり	9	81.8%	19	38.0%	2	11.8%	
以前とのギャ ップ	他の介護なし	2	18.2%	31	62.0%	15	88.2%	ns
	ギャップがありがたい	2	18.2%	13	24.5%	8	34.8%	
	上記以外	9	81.8%	40	75.5%	15	65.2%	

・暮らし向きについてはFisher直接法を用いた。

4. 介護開始時の認知的介護評価に関連する事柄  
 介護開始時の認知的介護評価において、介護開始時に介護者と被介護者が二人世帯であることは、3つの否定的評価と負の関連がみられた。暮らし向きは否定的評価のうち社会活動制限感と介護継続不安感に、肯定的評価のうち、介護役割充足感にそれぞれ負の関連を示していた。介護前からの介護者と被介護者との関係においては、被介護者への尊敬の程度が3つの否定的評価と負の関連を、2つの肯定的評価と正の関連を示した。また、介護前からの介護の自覚が関係性における精神的負担感と負の関連を、介護前の相談しあえる間柄の程度が介護役割充足感と正の関連を示していた。なお、VIF値（1.025-3.284）から独立変数間に多重共線性がないことを確認した。

5. 一定期間介護継続後の認知的介護評価に関連する事柄

介護を開始して一定期間が経過したあとの認知的介護評価において、続柄（息子を基準とした場合の

娘の介護）が関係性における精神的負担感と正の関連があった。暮らし向きについては介護開始時と同様、否定的評価のうち社会活動制限感と介護継続不安感に負の関連を示していたが、肯定的評価には関連がみられなかった。被介護者の状況では、介護度の重さと介護役割充足感、高齢者への親近感といった肯定的評価との間に正の関連がみられ、被介護者の最近の変化が介護継続不安感に正の関連を示していた。また、被介護者の姿が以前とギャップがあつてつらいと感じることについても介護継続不安感と正の関連がみられた。被介護者への尊敬の程度は、社会活動制限感を除く2つの否定的評価に負の関連を、3つの肯定的評価に正の関連を示していた。家族からの支援の満足度は認知的介護評価に有意な関連はみられなかったが、近隣友人からの支援の満足度は、否定的評価のうち社会活動制限感、介護継続不安感に負の関連を、肯定的評価のうち高齢者への親近感に正の関連をそれぞれ示していた。なお、VIF値（1.095-2.935）から独立変数間に多重共線性がないことを確認した。

表5 介護開始時の認知的評価に関連する事柄

標準化係数（β値）

関連項目	社会活動制限感	介護継続不安感	関係性における精神的負担感	介護役割充足感	高齢者への親近感
介護者続柄A	-.032	-.016	.095	.188	.209
介護者続柄B	.075	-.053	.146	.004	-.042
開始時の就業の有無	.053	.000	.178	.119	.029
開始時二人世帯	-.208*	-.218*	-.258**	-.129	-.138
暮らし向き	-.405***	-.294**	-.100	-.212*	-.107
介護保険の知識	-.058	-.205	-.008	.168	.066
介護前からの自覚	-.142	.042	-.230*	.054	.053
介護前の生活の把握	-.124	-.200	-.132	-.091	.059
介護前の相談しあえる間柄	-.002	-.157	-.102	.257*	.078
被介護者への尊敬	-.338**	-.377**	-.457***	.282*	.538***
N	79	78	78	78	77
F値	4.069***	3.874***	5.272***	3.425**	4.696***
決定係数(R <sup>2</sup> )	.374	.366	.440	.338	.416
調整済み決定係数	.282	.272	.357	.239	.327

\*: p < .05      \*\*: p < .01      \*\*\*: p < .001

- ・ダミー変数 介護者続柄A (夫：1 息子：0 娘：0)
- ・ダミー変数 介護者続柄B (夫：0 息子：0 娘：1)
- ・ダミー変数 開始時の就業 (なし：0 あり：1)
- ・ダミー変数 開始時被介護者との二人世帯 (該当なし：0 該当あり：1)
- ・ダミー変数 介護前からの自覚の程度 (低い：0 高い：1)
- ・ダミー変数 介護前の生活の把握の程度 (低い：0 高い：1)
- ・ダミー変数 介護前の相談しあえる間柄の程度 (低い：0 高い：1)
- ・ダミー変数 被介護者への尊敬の程度 (低い：0 高い：1)
- ・暮らし向き たいへんゆとりがある：4 ~ たいへん苦しい：1 (4段階)
- ・介護保険の知識 手続きや内容を知っていた：4 相談の場所を知っていた：3 制度があることだけ知っていた：2 ほとんど知らなかった：1

表6 一定期間介護継続後の認知的評価に関連する事柄

標準化係数 ( $\beta$  値)

関連項目	社会活動制限感	介護継続不安感	関係性における精神的負担感	介護役割充足感	高齢者への親近感	自己成長感
介護者統柄 A	-.017	.231	.142	.036	-.163	.139
介護者統柄 B	.066	.202	.362*	-.036	-.111	.024
期間年分類	.160	-.022	.232	-.034	.010	-.089
暮らし向き	-.349**	-.229*	-.138	-.074	-.097	.076
介護度 (7段階)	-.045	-.176	-.222	.280*	.206*	.227
被介護者の最近の変化の有無	-.047	.208*	.033	-.140	.067	.120
介護前の相談しあえる間柄	.068	.017	.084	.164	.090	.013
被介護者への尊敬	-.017	-.317**	-.449**	.399**	.553***	.337*
以前とギャップがあつてつらい	.112	.252**	.184	.198	-.048	.089
代替者の有無	-.153	.058	.100	-.128	.020	.114
家族からの支援の満足度	-.186	-.152	-.017	-.096	.045	.107
近隣友人からの支援の満足度	-.242*	-.230*	-.178	.029	.243*	.049
介護保険の知識	.056	-.014	.067	-.063	-.011	-.027
N	73	72	69	71	70	73
F 値	2.491**	5.070***	2.815**	2.512**	5.131***	1.645
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.354	.532	.400	.364	.544	.266
調整済み決定係数	.212	.427	.258	.219	.438	.104

\*:  $p < .05$ \*\*:  $p < .01$ \*\*\*:  $p < .001$ 

- ・ダミー変数 介護者統柄 A (夫: 1 息子: 0 娘: 0)
- ・ダミー変数 介護者統柄 B (夫: 0 息子: 0 娘: 1)
- ・ダミー変数 被介護者の最近の変化 (なし: 0 あり: 1)
- ・ダミー変数 介護前の相談しあえる間柄の程度 (低い: 0 高い: 1)
- ・ダミー変数 被介護者への尊敬の程度 (低い: 0 高い: 1)
- ・ダミー変数 以前とギャップがあつてつらい (なし: 0 あり: 1)
- ・ダミー変数 代替者の有無 (なし: 0 あり: 1)
- ・ダミー変数 家族の支援の満足度 (低い: 0 高い: 1)
- ・ダミー変数 近隣友人の支援の満足度 (低い: 0 高い: 1)
- ・期間年分類 10年以上: 4 5年以上10年未満: 3 2年以上5年未満: 2 2年未満: 1
- ・介護度 要介護5から要介護1: 7・6・5・4・3 要支援2から要支援1: 2・1
- ・暮らし向き たいへんゆとりがある: 4 ~ たいへん苦しい: 1 (4段階)
- ・介護保険の知識 手続きや内容を知っていた: 4 相談の場所を知っていた: 3 制度があることだけ知っていた: 2 ほとんど知らなかった: 1

#### IV. 考察

##### 1. 統柄別にみた認知的介護評価

本研究における息子介護者の回収率は16.2%であり、娘介護者の39.7%、夫介護者の31.6%と比べて低かった。その理由の一つとして息子介護者は就業している年齢層が多いことが挙げられる。アンケートを記載する時間が十分に取れないということと、事業所等を介しての配布であったため、事業所等担当者が、限られた期間内に多忙な息子介護者に質問紙を配布することができなかったことも考えられ、就業している割合の低い夫介護者に比べて回収率が低くなったと考えられる。また、男性介護者は女性に比べて専門職に相談することが少ないことが示唆されており(石橋, 2002)、娘介護者からの回答が息子介護者よりも多く得られたのは、娘介護者のほうが息子介護者に比べて専門職に相談や援助を求めやすく、信頼関係を構築しやすいことが影響していると考えられる。

介護開始時及び一定期間介護継続後の認知的介護評価の統柄による平均値の差を一元配置分散分析に

より検定したところ、いずれの下位尺度も有意差はみられなかった(表3)。

次に、各統柄について両時点でのどのような変化があるのか、その傾向を分析した。息子介護者の否定的評価は、介護開始時と一定期間介護継続後で変化がみられなかった。介護開始時の介護保険の知識について、「制度があることだけは知っていた」及び「ほとんど知らなかった」と回答した息子介護者は、83.3%と8割を超えていた。また、現在の被介護者以外の介護を「過去にしていた」と「現在している」を合わせると息子介護者は81.8%で、夫介護者(11.8%)に比べて有意に高かった。高齢の両親が存在し、息子が一方の親を介護する場合には、もう一人の親も看なければならぬ状況になる場合が多いと考えられる。暮らし向きについて、新鞍ほか(2008)は、息子介護者の経済的負担感が夫、妻、娘、嫁よりも有意に高いことを、上田ほか(2009)や湯原(2017: 23)は高齢者虐待の加害者として息子が多い要因の一つとして、経済的困窮の問題を挙げている。つまり息子介護者の経済的困難感他統柄より高



いと推測される。しかし、本研究においては、娘や夫との差はみられず、息子介護者の回答数の少なから対象者に偏りがあったことは否めない。

被介護者への尊敬の程度では4段階での回答を「尊敬の程度が高い」と「尊敬の程度が低い」という2段階に区分し、続柄による差を分析した。続柄間での差はみられなかったが、「尊敬の程度が低い」回答は、息子介護者が27.3%、娘介護者が26.4%と、子介護者の1/4以上が、母親を「あまり尊敬してなかった」「尊敬してなかった」と回答しており、そのような母親との関係の中で介護を継続していることがわかった。息子介護者への支援として、介護開始時に介護保険制度をうまく活用できるように、介護前からの周知に努めることが重要である。また、息子介護者は両親を同時に介護するダブル介護のリスクを抱えており、その場合は介護保険サービスだけでは十分に対処することが難しい。息子介護者がインフォーマルサポートをうまく活用できるよう調整することが支援者の重要な役割であるといえよう。

娘介護者の否定的評価は、介護開始時と一定期間介護継続後で変化はみられなかった。娘介護者の介護開始時の状況として、就業していた娘介護者の割合は、夫介護者に比べて有意に高かった。また、介護開始時に家族員の変化があった娘介護者は3割を超えていた（表4）。このような介護開始時の時間的制限や、生活変化の大きさが娘介護者の否定的評価に関連している可能性がある。介護開始時に被介護者と二世帯であった割合は、夫介護者に比べて、娘介護者は有意に低かった。被介護者と二世帯であることが被介護者との心理的な距離を縮め、高齢者への親近感に影響していると考えられる。娘介護者の肯定的評価は、一定期間介護継続後に介護役割充足感及び高齢者への親近感のいずれも有意に上昇しており、娘介護者においては、介護による関わりが肯定的評価を上昇させることが示唆された。

夫介護者の否定的評価では、一定期間介護継続後に介護継続不安感が有意に上昇していた。高齢の妻を介護する夫介護者の場合、自らも高齢であるため介護が長期にわたると、身体的負担や自らの健康への不安などから介護継続不安感が増していくと考えられる。一方、夫介護者の肯定的評価は、介護開始時と一定期間介護継続後で変化はみられなかった。

岩田・堀口（2016）は、夫介護者が娘や嫁に比べて社会活動制限感が高いことを報告している。本研究で社会活動制限感の高さが夫介護者にみられなかったのは、夫介護者の平均年齢が80.9歳であり、岩田・堀口（2016）の研究の75.2歳よりも高齢であったことが理由の一つとして考えられる。暮らし向きでは、「たいへん苦しい」と回答した人が夫介護者では25.0%と、娘介護者の5.7%に比べて有意に高くなっている。このような経済的ゆとりのなさが、介護を継続する上で不安を増強させる一因になっていると考えられる。これまで認知的介護評価の変化について言及された論文は見当たらず、本研究により、夫介護者が介護を継続することによって介護継続不安感といった否定的評価が高まることが示唆された。

## 2. 介護開始時の認知的介護評価に関連する事柄

介護開始時に二世帯ではないこと、暮らし向きにおいて経済的にゆとりがないこと、介護前から自分が介護をするといった自覚がないこと、被介護者への尊敬の程度が低いことが介護開始時の否定的評価が高いことに関連し、一方で、経済的にゆとりがないこと、介護前から相談しあえる間柄であったこと、被介護者への尊敬の程度が高いことが、介護開始時の肯定的評価が高いことに関連していることが示された（表5）。

続柄別状況では、介護開始時に二世帯であった割合は夫介護者が高かった。夫介護者の介護開始時の否定的評価は有意差はなかったものの、他の続柄よりも低かったため、そのことが影響している可能性がある。先行研究では、高齢者虐待の要因の一つとして介護者と被介護者の閉じた関係性が指摘されており（湯原，2017：86）、息子が虐待者である場合にはその半数（50.3%）が被虐待者と虐待者のみで構成される世帯であること（認知症介護研究・研修仙台センター，2014）が報告されている。つまり、二世帯であることが否定的評価を低下させる事柄であるとは言いがたく、続柄によって異なる可能性が高い。今後は続柄ごとに十分な回答数を得た上で、分析する必要がある。

経済的にゆとりがないことは社会活動制限感と介護継続不安感の高さに関連していた。介護開始により、これまでの生活費に介護費用が上乗せされるこ

とになる。また、本研究で介護により退職した人は9人(10.0%)、配置転換や就業時間の短縮などの就業の変化があった人が14人(15.6%)おり、介護による収入の減少が生じている。経済的なゆとりのなさが、介護開始時から将来への不安を増強させ、介護者の生活に制限を与えていることが示唆された。一方、経済的なゆとりのなさは、介護役割充足感といった肯定的評価の高さにも関連していた。経済的に余裕がない状況での介護は、将来への不安を抱く一方で、そのような逆境の中で介護を行うことにより介護役割充足感が増しているのかもしれない。

介護前から自分が被介護者を「介護しないだろう」と思っていた人や「介護する気はなかった」人は関係性における精神的負担感が高かった。自由記述のなかに、自分が介護することへの不満や苛立ちを表出する人も少なからず存在し、自分の意思とは無関係に、思いがけず介護に携わらざるを得なかった介護者の心理的負担へのアプローチの必要性が示唆された。

被介護者を尊敬してきたか否かということが介護開始時の認知的介護評価に大きく関連していた。続柄別にみた認知的介護評価の箇所でも述べたが、子介護者の1/4以上が、母親を「あまり尊敬してなかった」「尊敬してなかった」と回答しており、被介護者と良好ではない関係のまま介護という事態に直面し、肯定的な感情を抱けず、否定的な感情が高まった状態で介護を開始する危険性が示された。また、被介護者と相談しあえる間柄か否かということも、尊敬の程度と同様、認知的介護評価に関連しており、介護者と被介護者の関係を適切にアセスメントする必要性が示された。

### 3. 一定期間介護継続後の認知的介護評価に関連する事柄

一定期間介護継続後は、続柄(息子を基準とした場合の娘の介護)、暮らし向きにおいて経済的にゆとりがないこと、被介護者の最近の変化があったこと、被介護者への尊敬の程度が低いこと、以前とギャップがあつてつらいこと、近隣友人からの支援の満足度が低いことが否定的評価の高さと関連していた。一方で、被介護者の介護度が高いこと、被介護者への尊敬の程度が高いこと、近隣友人からの支援の満

足度が高いことが肯定的評価の高さと関連があつた(表6)。

続柄(息子を基準とした場合の娘の介護)は、関係性における精神的負担感に関連していた。これは、被介護者への尊敬の程度の低さを含む介護者と被介護者との関係性の影響が考えられる。経済的にゆとりがないことは、一定期間介護継続後においても社会活動制限感や介護継続不安感に関連しており、介護期間を通して継続するものと考えられる。

被介護者との関係では、介護開始時から引き続き被介護者への尊敬の程度が肯定・否定両側面に大きく関連していた。6つの下位尺度のうち社会活動制限感のみ関連がみられなかった。社会活動制限感、介護を継続するなかで介護者・被介護者の関係性よりも、暮らし向きや近隣友人からの支援の満足度といった環境的な要因の影響を受けることが示唆された。被介護者の現在の状態が以前とギャップがあつてつらいと感じることは介護継続不安感と関連していた。北本・黒田(2018)は、息子介護者を対象にした質的研究において、「自分を育ててくれた母とのギャップ」が介護負担に影響すると述べている。本研究において、被介護者の状態が以前とギャップがあつてつらいと感じる割合に続柄による差はなかったが、全体として以前とギャップがあつてつらいと感じる割合は25.6%であり、以前とギャップがあるが気にならないと感じる割合32.2%よりも低い状況である。支援者は、介護者が被介護者の状態を客観的に捉えることができるよう支援する必要がある。

周囲からのサポートに関しては、家族からの支援の満足度は認知的介護評価には関連を示さなかったが、近隣や友人からの支援の満足度は、社会活動制限感や介護継続不安感といった否定的評価や、高齢者への親近感といった肯定的評価に関連していた。家族からの支援の程度は介護者にとって、これまでの生活のなかである程度予測することが可能であるが、近隣友人からの支援は想定していない場合も多いであろう。介護という事態に直面したときに、自ら築き上げた人間関係の中から想定していた以上のサポートが得られれば、肯定的・否定的両評価に良い影響を与える可能性が見出された。広瀬ほか(2006)は、インフォーマルサポートに対する満足度が低いほどすべての否定的評価が上昇し、満足度が

高いほど高齢者への親近感といった肯定的評価が高くなると述べている。本研究では関係性における精神的負担感との関連が表われなかったが、それ以外はすべて同様の結果が得られており、広瀬ほか（2006）の分析を支持する結果となった。介護を継続する上で近隣や友人といったインフォーマルな支援の重要性が示唆された。

被介護者の状況では、介護度が上がるほど、介護役割充足感や高齢者への親近感が上昇するという結果となった。要介護度は基本的に介護にかかる手間の時間によって決められており、介護度が高いほど介護者は被介護者の身体的介護を行う時間が増え、被介護者と接する時間が増加する。そのことが介護役割の認識を高め、被介護者との親近感を高めることにつながっていると考えられる。広瀬ほか（2006）は、夜間介護がある場合のほうが介護役割充足感が高いと述べており、介護の手間がかかる場合に肯定的評価が上昇するという点で共通する結果となった。また、被介護者の最近の変化の有無が介護継続不安感と関連していた。北本・黒田（2019）は、息子介護者を対象とした研究において、母の急激な変化により一旦整いつつあった介護生活のリズムに乱れが生じると述べている。被介護者の最近の変化は介護生活の乱れを引き起こし、介護継続不安感を高めることにつながることが示唆された。

本研究で、介護開始時と一定期間介護継続後の認知的介護評価に関連する事柄をそれぞれ示すことができた。介護開始時に大きく関連していた被介護者への尊敬の程度は一定期間介護継続後も、その関連は続いていた。長期間にわたって構築された介護者と被介護者の関係が、簡単に改善するとは思われない。しかし、良好でない関係のままでも介護を担っているということを周囲が認め、介護者の思いを尊重し、介護に価値を見出せるような働きかけをすることが重要である。一つの手掛かりとして、近隣や友人からの支援への満足度が上がるよう介護者の人間関係をアセスメントし、情緒的サポートや手段的サポートが得られるようなマネジメントを支援者が行う必要がある。

#### 4. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、回答数及び回収率が低かつ

たことが挙げられる。事業所等を通して配布するという方法を行ったが、すべて文書のみやり取りであったことや配布・回収のスケジュールが短期間であったことから、研究の趣旨が十分に伝わらず、配布までに至らなかった場合も多かったのではないかと考える。また、介護開始時と一定期間介護継続後という二時点での認知的介護評価を調べるため、設問数が多くなってしまったことも回収率の低さに影響したのではないかと考える。今後は、配布協力をしていただく事業所等の担当者に研究の趣旨を口頭で伝えた上で、十分な期間を設定する必要がある。また、認知的介護評価をより簡便に調査できる尺度の開発も必要である。さらに、本研究では対象が1市町村に限定されていることから地域的な偏りが生じている可能性も否めない。対象地域を広げ、広範囲で研究を進める必要がある。

アンケートにおける自由記述欄に、半数を超える回答者が介護を行う上での思いを記載していた。その中には介護前からの被介護者との関係性に関する記述も多く、本研究の結果と一致するような内容も記載されていた。今後は自由記述欄を分析し、本研究の認知的介護評価と合わせた分析を行ってきたい。

#### V. 結語

本研究により以下のことが明らかになった。

- 1) 一定期間介護継続後に、全体として介護における否定的評価は変化していなかったが、肯定的評価はいずれも有意に上昇していた。
- 2) 続柄別の認知的介護評価では、一定期間介護継続後に夫介護者は介護継続不安感といった否定的評価が上昇し、娘介護者は介護役割充足感、高齢者への親近感といった肯定的評価が上昇していた。
- 3) 息子介護者は他の被介護者を過去に介護していた、または現在介護している割合が高く、ダブル介護の危険性を孕んでいた。また、娘介護者は夫介護者に比べて、介護開始時に就業している割合が多く、被介護者と二世帯である割合が少なかった。
- 4) 否定的評価、肯定的評価の両側面に被介護者への尊敬の程度が関連しており、それは一定期間介護継続後も続いていた。
- 5) 近隣や友人からの支援の満足度は否定的評価が低

いことや、肯定的評価が高いことに関連していた。支援者は介護者と被介護者の関係やソーシャルサポートネットワークを適切にアセスメントし、介護者の意に合ったインフォーマルサポートが得られるようマネジメントを行う必要がある。

## 謝辞

今回、本研究にご協力いただきました介護者の皆様、また調査票の配布にご尽力いただきました事業所等の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 荒井由美子・田宮菜奈子・矢野栄二 (2003) Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版 (J-ZBI\_8) の作成—その信頼性と妥当性に関する検討—. 日本老年医学会誌, 40: 497-503.
- 広瀬美千代・岡田進一・白澤正和 (2005) 家族介護者の介護に対する認知的評価を測定する尺度の構造. 日本在宅ケア学会誌, 9 (1): 52-60.
- 広瀬美千代・岡田進一・白澤正和 (2006) 家族介護者の介護に対する認知的評価に関連する要因. 社会福祉学, 47 (3): 3-15.
- 市川伸一・中川正宣・大井玄・鈴木重任・深山智代・武長脩行・甲斐一郎・山崎信行・山本俊一・柄沢昭秀・名嘉幸一・當山富士子 (1985) 虚弱老人のための介護者・患者関係. 日本公衆衛生雑誌, 32 (5): 253-257.
- 石橋文枝 (2002) 在宅看護における家族介護者の対人認知に関する研究—男性介護者の対人認知の実態—. 藍野学院大学紀要, 16: 74-78.
- 岩田 昇・堀口和子 (2016) 要介護者の性別および続柄別に見る在宅介護の認知評価, 対処方略および生活への影響の相違. 日本公衆衛生雑誌, 63 (4): 179-189.
- 北本さゆり・黒田研二 (2018) 息子介護者にとって子どもの頃からの母子関係が母の介護に与える影響. 藍野学院大学紀要, 31: 25-37.
- 北本さゆり・黒田研二 (2019) 息子が母親を介護する際の心理的プロセス. 社会福祉学, 60 (2): 91-109.
- 厚生労働省 (2017) 平成 28 年国民生活基礎調査の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>, (参照日 2018 年 1 月 3 日).
- 厚生労働省 (2018) 平成 28 年度高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果. <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000197120.pdf>, (参照日 2018 年 4 月 1 日).
- Lawton, M. P., Kleban, M. H., Moss, M., Rovine, M., and Glicksman, A. (1989) Measuring caregiving appraisal. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 44 (3): 61-71.
- 中谷陽明・東條光雅 (1989) 家族介護者の受ける負担—負担感の測定と要因分析—. 社会老年学, 29: 27-36.
- 新鞍真理子・荒木晴美・炭谷靖子 (2008) 家族介護者の続柄別にみた介護に対する意識の特徴. 老年社会科学, 30 (3): 415-425.
- 認知症介護研究・研修仙台センター (2014) 高齢者虐待の要因分析等に関する調査研究事業報告書. [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/topics/dl/130705-2/2-23.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/topics/dl/130705-2/2-23.pdf), (参照日 2019 年 4 月 1 日).
- 櫻井成美 (1999) 介護肯定感をもつ負担軽減効果. 心理学研究, 70 (3): 203-210.
- 武長脩行・甲斐一郎・大井玄・深山智代・市川伸一・山本俊一・木内とき子・大塚ハナ・川口昌子 (1987) 寝たきり老人における異常精神症状発現と介護者・患者関係. 日本衛生学雑誌, 42 (2): 563-569.
- 上田照子・三宅真理・西山利正・田近亜蘭・荒井由美子 (2009) 要介護高齢者の息子による虐待の要因と多発の背景. 厚生指針, 56 (6): 19-26.
- 吉田久美子・南美子・黒田研二 (1997) 要介護高齢者の介護者の負担感とその関連要因. 社会医学研究, 15: 7-12.
- 湯原悦子 (2017) 介護殺人の予防—介護者支援の視点から—. クレス出版, 8-86.
- Zarit, S. H., Reever, K. E., and Back-Peterson, J. (1980) Relatives of the impaired elderly: Correlates of feelings of burden. *The Gerontologist*, 20 (6) 649-655.

# Changes in the Psychological State of Caregivers for Elderly Women : Comparison of Sons, Daughters, and Husbands as Caregivers

Sayuri KITAMOTO\*, Kenji KURODA\*\*

\* Kansai University, Faculty of Health and Well-being

\*\* Kansai University, Graduate School of Health and Well-being, Doctoral Course

## Abstract

This study aimed to clarify the changes in the cognitive state of caregivers of elderly women at the beginning of the care and the time of assessment and to identify issues related to cognitive caregiving appraisal at each time point.

The respondents were the elderly women's sons, daughters, and husbands who are their immediate caregivers. A total of 286 questionnaires were mailed to the respondents and 94 completed questionnaires (32.9% return rate) were returned. The caregivers who responded to the questionnaire were 12 sons, 54 daughters, 24 husbands, and 4 others. In all, 90 responses were analyzed. The survey items were condition of the care recipients, working situation of the caregivers, presence or absence of an alternative, economic situation, and relationship with the care recipients. The dependent variable was the cognitive caregiving appraisal scale.

The results are as follows. (1) After a period of care, the negative caregiving appraisal did not change, but all positive caregiving appraisal significantly elevated. (2) The husbands of care recipients reported increased "anxiety about continuing caregiving," and the daughters of care recipients reported increased "fulfillment about the caregiving roles" and "affection for the elderly." (3) Sons of care recipients were at risk of caring for multiple recipients. (4) Both negative and positive appraisals were related to the degree of respect the caregivers had for the care recipients. (5) Satisfaction with support from neighbors and friends was related to cognitive caregiving appraisal.

It is important for care professionals to properly assess the relationship between the caregivers, the care recipients, and the social support network in place.

Keywords: elderly woman, kinship, cognitive caregiving appraisal, positive appraisal, negative appraisal